



2008 年度気象水文分科会報告

分科会総会

日 時：2008 年 9 月 26 日 (金) 17:30~18:15
会 場：東京大学本郷キャンパス工学部 3 号館 34
会議室

審議事項

1. 大畑哲夫会長の退任に伴い、兒玉会員が新会長として選出された。
2. 斉藤幹事長の退任に伴い、新幹事長として本谷会員が会長から指名され、承認された。
3. 山崎 (剛), 小南幹事の退任, 本谷, 水津, 山崎 (学) 会員の幹事への新任が会長から提案され、承認された。

報告事項

1. 若手の幹事を若干名加えることを今後検討する。
2. 監事の規定が分科会規約にはないので、今後規約の変更を検討する。
尚、監事は本人の承諾を得た後に太田監事を再任する予定である。

研究セッション*

日 時：2008 年 9 月 26 日 (金) 16:00~17:30
会 場：東京大学本郷キャンパス工学部 2 号館 213
講義室

*今回は衛星観測分科会との合同セッションとして総会に先立ち開催。

今回新たな試みとして水文気象分科会と衛星観測分科会による合同セッションとして「2007/08 の北極圏」をキーワードに研究発表が行われた。北極圏は海水のカタストロフィックともいえるような減少が危惧されており、大気循環・海洋循環・海水・陸域特有のプロセスの 4 つが複合的に関わりあったシステムであることから、多角的な研究アプローチがなされている。

セッションでは 5 件 (水文気象分科会より 2 件, 衛星観測分科会より 3 件) の発表者による講演があったが、このうち主に水文気象分科会から

の話題提供である 2 件について報告する。

進行役の当分科会斉藤和之幹事長による趣旨説明の後、まず、ゲストとして海洋研究開発機構・地球環境フロンティア研究センター気候変動予測研究プログラムの高谷康太郎氏から「北半球寒冷域の大気循環」として主に冬季の大気循環を中心とした研究紹介が行われた。講演は大気大循環パターンや北極振動 (AO) の初歩的な解説を含む丁寧なものであり、AO に数ヶ月先行してスカンジナビア-バレンツ海上で高気圧場偏差の存在が見られるとの話や夏の大気循環場が冬季まで影響を残しており重要であるとの報告が興味深かった。

続いて進行役でもある斉藤和之氏 (地球環境フロンティア研究センター水循環予測研究プログラム/アラスカ大) より、「大陸規模積雪と 10 年規模共変動」と題して、積雪分布と大気場の大気陸面相互作用についての研究報告が行われた。秋の大陸規模の積雪分布が冬季 AO の変動をもたらすというもので、積雪分布偏差による冷却効果が定常 Rossby 波の強化をもたらす、それが上空へ伝播していくことで成層圏下部の極渦弱化につながるという過程が考えられていることなどが説明された。

合同セッションではこの後衛星観測分科会からの 3 件の報告が行われ、主に光学リモートセンシング手法による北半球積雪変動の傾向について (JAXA/EORC 堀 雅裕氏), 北半球季節海水域の海水変動について (千葉大 直木和弘氏), 北極海の海水変動について (北見工大 舘山一孝氏, 衛星観測分科会事務局長) の話題提供があった。北極圏を大気側と雪氷・海水側から考えるという点で非常に有意義な合同セッションになったと思う。

(秋田大学教育文化学部地学研究室 本谷 研)

(2008 年 10 月 15 日受付)